様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５　月　２６　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０３９２
研究課題名（和文）　言語進化理論からみた英語史における「統語的埋め込み構文」の創発の意味について
研究課題名（英文）　THE EMERGENCE OF SYNTACTIC EMBEDDED STRUCTURE IN THE HISTORY OF ENGLISH: WHAT DOES THIS MEAN IN TERMS OF LANGUAGE EVOLUTION THEORY?

研究代表者
大澤　ふよう（OSAWA　FUYO）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：１０１９４１２７

研究成果の概要：本研究は「統語構造」は何故変化していくのかを生成理論の枠組みのなかで、明らかにしようとするものである。主節動詞の「目的語」として、節（不定詞を含む）が出てくる複文的構造は英語の歴史の中では、比較的新しい構造であることを主張し、このような埋め込みは、名詞句の中別の名詞句を埋め込む現象としてもみられることを明らかにした。さらにそれは、一般化していうと、ある概念の中に別の概念を埋め込むという、人間の言語の本質と深く関わっている問題であることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	５００，０００	０	５００，０００
２００７年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２００８年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	１，７００，０００	３６０，０００	２，０６０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：統語構造、創発、生成文法、埋め込み、機能範疇、古英語、進化

１．研究開始当初の背景

Science 誌(2002 年)に Hauser, Chomsky, and Fitch の “The Faculty of language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?” が掲載されて以来、言語進化・言語変化の問題がさらに大きな注目を集めていた。それまで、生成理論の最先端が言語変化を論ずることはそれほど一般的ではなかった。この論文の中で、recursion（再帰）ということが、人間言語の本質の１つであることが述べられ、さらに従属節こそがこの recursion の印であるとも述べられている。これを歴史言語学の観点から解釈してみると、進化論的にいえば、埋め込み構文の出現の方向に言語が向かうと主張することは妥当であり、それが証明されることは理論面にとっても、歴史言語学からみても有意義であると思われる。古くは Jespersen が唱えた parataxis （並列構造）から hypotaxis（従属構造）が発展してきたという主張がある。これは多くの批判をうけてきたが、上のような Chomsky たちの主張を踏まえると、生成理論の枠組みの中でもう一度評価できる点があるのではないかと考えた。

この問題を研究することは統語構造という、言語において変化しにくいと思われる部分が何故、変化していくのかという難しい問いに何らかの答えを与えてくれるのではないかと期待された。

２．研究の目的

本研究は「統語構造」は何故変化していくのか、について生成理論の枠組みのなかで、明らかにしようとするものである。具体的にとりあげるのは英語の歴史のなかで「統語的埋め込み補文構造」が創発してきたことを証明し、言語進化学的な観点からそれが人間言語の本質に深く関わっていることを見ようというものである。 同時に、英語は印欧語族の中でも変化が激しい言語といわれるが、言語の本質には以下で述べるような時間的変化の方向性が存在すると思われるが、英語の変化の速度を加速した要因には、上で述べたような言語に本来備わった要因に、社会的な側面がどのように関わっているかも明らかにしたいと考えた。

「埋め込み補文」構造というのは、１つの「命題」の中にさらに別の「命題」が埋め込まれるということであるが、単に意味的なものではなく、下位の節が主節の動詞の項(argument)として機能範疇C(complementizer)、つまり接続詞やI(inflection)つまり、屈折によって埋め込まれていることを意味する。したがって単なる従属構造(subordination)とも違う。従属構造には、機能範疇の存在がなくても可能な、つまり、ある命題が主節の内的構成要素として存在しているのではないような場合、たとえば主節に単に付加されている場合もあるからである。ここで言及している「埋め込み」は、機能範疇によって、完全に主節の構成要素となっている場合のみに限定する。

この主張は古い時代の言語が１つの命題の中に別の命題を埋め込む手段を持っていなかったと主張するわけではない。あるいは、古い時代の言語が、現代の言語に比べて単純であるとか、言語は時の経過によってより高度になるのであるといった内容を主張しているわけではない。現代英語が使っているような機能範疇による「埋め込み構文embedding」は無かったが、様々な形で複数の命題を表すことはできた。古くはJespersen が唱えた parataxis から hypotaxis が発展してきたという主張があるように、文を並列させることによって、複雑な命題を表すことは可能であった。

埋め込みと言うのは先に述べたように、統語的な問題なので、言語の諸部門の中でもっとも変化しにくいと思われる統語形式が何故変化していくのか、という問題に解答を与えたいという狙いも本研究に存在する。形態的変化は、音韻的変化が背景にあったりする、また名詞などの語彙の変化は社会の中で当該物が消える、内容が変化するなどが原因としてすぐ思いつく。しかし、統語構造は、そういう意味では、比較的変化しにくいということが容易に推察できる。ある時期、ある「一定の統語形式」が、ある「一定の意味」を伝えることが言語共同体の中で確立しているわけだから、それが変化しなければならない理由は簡単には見出せない。生成文法の立場から「言語変化」と言うものはありえない、あるのは、「言語規則の変化」だけだとして歴史言語学の独立した必要性を認めない人もいる。しかし、古英語と現代英語とでは、やはり統語構造は大きく変化しているのは否めない事実であり、それが「言語規則の変化」のせいだと言っても、ではなぜ「言語規則の変化」が起こるのか、あるいは起こったのかを説明する必要は、しかし残る。

フィロロジーの成果もひきついで、かつ社会的側面からの影響も考えて、この難しい問題に何とか一定の解決の道をさぐりたい。

３．研究の方法

研究の方法としては、生成文法理論の枠組みの中で、フィロロジーの成果もひきついで行うことをめざした。言語変化の理論的な枠組みとしては創発理論(emergence theory)を用いる。創発理論は、一般的に言語の変化の方向性を次のように捉える。すなわち言語は、内容語、あるいは語彙範疇である名詞・動詞・形容詞などからのみ構成される段階から、機能範疇(機能語、さらに時制要素を表すための屈折形などを加えたもの)が徐々に表れ（創発と呼ぶ）てくる方向に変化していく。別の言い方をすれば、歴史言語学でよく議論される「文法化」(grammaticalization)と呼ばれる現象も創発現象であるとも分析できるわけで、創発理論の中に取り込むことができる。この機能範疇の出現が新しい統語形式をもたらした、すなわち統語変化をもたらしたと分析できると主張する。

具体的には、that-節の埋め込み、さらに不定詞も節であることからその両方を対象にとりあげる。ということはそれらの節構造は、機能範疇の出現以前は存在していないということであり、それをまず証明する。それらの先行形は現代英語とは違う分析をうけるはずである。次に、何時ごろ、どのようにして統語的埋め込みが出現したかを、機能範疇の出現を背景として論じていく。

４．研究成果

研究目的などでも書いたように、当初は埋め

込み構造の出現は、社会的な要素も大きく貢献しているのではないかと考え、その面での研究も同時に進める予定だったが、結果としては、この埋め込み構造が、人間言語にとっての本質的な要素であり、しかも節のなかに別の節を埋め込むという構造を中心に考えていたが、研究の中で、埋め込みというのは、節に節を埋め込むだけではなく、他の構造、具体的には名詞句の中においても見られる現象であることがわかってきた。

一年目は、理論的な基礎固めを行い仮説の構築をめざした。最初は、従来から言われている主節に別の節が入っている構造を主な対象としてのみ考えていた。確かに英語の歴史において、現代英語のような埋め込み構造は存在していないとわかった。that 節を用いた埋め込み構造は古英語においては、機能範疇を媒介として動詞の項として存在しているのではないことがわかった。

またさらに不定詞の先行形は、古い時代の英語においては、動詞に由来する名詞であり、格変化などの名詞的性格をもっており、逆に完了形や受身形をとるといった動詞的性質がなかったことから、現代英語のように機能範疇の投射としての節構造ではなかったことははっきりした。このことは、伝統的な用語でいうと現代英語では believe がとるような「不定詞付き対格構文」は存在していなかったことや、繰り上げ構文の不在、不定詞の主語も古英語の時代には存在していなかったことなどから充分に証明が可能であることがわかった。

こうした点をまとめて LEXICON に掲載された From Parataxis to Hypotaxis において論じた。

しかし、研究を進めるうちに節以外の構造にも目を向けなければ、この創発というメカニズムが言語にもつ意味が充分には捉えられないのではないかと考え始めた。すなわち、節以外の構造、名詞句にも同じような「埋め込み」が起こっていること、しかもこれが同じく史的に出現したことがいえるということが分かった。現代英語の名詞句は、Abney(1987)らの DP 仮説によれば名詞 N の投射ではなく、機能範疇 D の投射であるが、この D は現代英語には存在するが古英語には存在しない。これは、従来から古英語において存在するのは、現代英語のような義務的な冠詞ではなく、指示詞であると分析されてきたことと一致する。古英語の名詞句は NP である。つまり機能範疇 D は時間の経過とともに、英語に創発してきたことになる。この D の創発により、可能になった構造に the king of England’s hat のような群属格がある。これも DP の中に別の DP が埋め込まれている構造である。すなわち上位の DP の Spec の位置にもう１つの DP が入っているのが群属格である。この群属格は古英語には存在しておらず、分離属格が用いられていた。群属格が中英語期になって可能になったのは、中世期に D が英語に創発し、その結果可能となった構造であると考えれば、無理なく説明できる。

またこの立場は名詞句構造と節構造の並行性が生成文法で言われていることと一致する。名詞句も節と同様な構造を持ち、同じような移動があるといわれる。V-to-I-to C と N-to-D など、また属格は主語に相当すると言われている。これも、D の創発の結果であると考えられるのではないか

この点を学会において発表し、また The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition という論文にまとめて、John Benjamins 社から出版された単行本の中に掲載した。

このように、研究をすすめるうちに、社会的要因もこの創発には否定できないが、やはり言語に内在する要因が一番大きな貢献をしているのではないかと考えるようになった。

こうして研究で明らかになった、節構造の埋め込み現象と名詞句の中の埋め込み現象が統一的にとらえられるということを踏まえて、さらに、埋め込みという現象の意味を、さまざまな観点からも追求してみた。Hauser, Chomsky, and Fitch (2002)の中で言われている recursion と共通する部分もあるが、それに対する批判的なども考慮し、Hauser, Chomsky, and Fitch (2002)では、ややあいまいであった、と思われる recursion の定義を明確にした。すなわち、統語的埋め込み構造こそ人間言語たるゆえんであること、そしてそれはある要素を、同一ステータスのものの中に埋め込むことで、それは機能範疇によって可能になったと提案した。本研究で考えている埋め込みは単なる繰り返しとは、本質的に違うものであるということを主張した。したがって、当該の機能範疇が存在しないうちは、それに関係した埋め込み現象は存在しない、ということになる。

統語的埋め込みは、概念の中に概念を埋め込むという、しかも、それが単なる意味的なもののみに基づいているのではなく、構造に基づいて行うという、これは人間言語にしか存在しない特有なものであることを提案した。動物にも言語がある、あるいは、言語はコミュニケーションの手段として発達してきた、という説に対して、動物言語といわれるものにも、繰り返しあるいは等位的なものがある、ということを認めながらも、あるいは、コミュニケーションの手段としての言語の側面も認めながら、このような単なるコミュニケーション手段というものと、人間言語

とはまったく本質的には違うものであるということを、論じた。すなわち、節の中に、別の節を、機能範疇を媒介として埋め込む、ＤＰの中に別のＤＰを埋め込むという、確認された英語史において起こった事実を考えれば、埋め込みは意味的には希薄な、統語的要素である機能範疇が存在するからこそ可能になっている、という点は言語の変化、進化を考えるうえで重要であると思われる。
このような変化は、英語が統語優位の変化の方向性を向いているのではないかということを示唆しているとも考えられ、新たな研究の方向性が見えてきた。これらをまとめて幾つかの学会において発表した。

最終年度である３年目は、それまでの研究で明らかになったことを踏まえて、英語の発達の過程は、語彙範疇あるいは、内容語からのみ成り、それらが意味的に結びついている段階から、意味とは切り離された、文法的存在、すなわち機能範疇(具体的には冠詞や助動詞)が出現して、そして発達していく状態への変化としてとらえられ、このような変化は、英語が統語構造優位の言語に変化しつつあることを表しているということを、証明するための研究を行った。統語的埋め込みは、概念の中に概念を埋め込むという、しかも、それが単なる意味的なもののみに基づいているのではなく、構造に基づいて行うという、人間言語にしか存在しない特有なものであることを論じた研究論文 Recursion in Language Change をまとめ、ドイツの Peter Lang 社から出版された論文集に、掲載した。

また、英語の変化の方向性は、語彙範疇あるいは内容語のみからなる段階から、機能語、あるいは機能範疇をも含む段階への変化であるということ、機能範疇があまり発達していない段階の言語はどこか、似てくるといったことを、受け身文、非人称動詞構文といった構文から論じた研究を
Impersonal and passive constructions: from a viewpoint of functional category emergence: What happened to them in the History of English?という論文にまとめ学会発表した。この論文は、上記の研究課題に関連した研究で、機能範疇が存在しないか、あまり発達していない言語における統語規則の在り方に関しての研究である。今後の新たな研究へとつながっていくと思われる。

また、１１月に筑波大学で開催された第２６回日本英語学会において「機能範疇の創発―通言語的視点から」と題したシンポジウムを企画し開催した。広島大学、首都大学東京、日本大学の研究者とともに、機能範疇創発の観点からの言語変化について、名詞句の中での埋め込みとしてのＤＰの創発、節の中に別の節が埋め込まれる現象、すなわちＣＰの創発などについて発表および討論をおこなった。英語以外の言語、同系のドイツ語や、系統が違う日本語においても機能範疇の発達度に応じて言語の在り方の違いが説明できることが確認され、大変大きな収穫があった。

これまでの研究の一応の集大成となり、また、今後の新たな研究への展望が開けた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）

① 大澤ふよう、Recursion in Language Change、
Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts.(Studies in English Medieval Language and Literature Series. Vol. 22)Peter Lang 社、査読有、２００８年、３５５－３７０

② 大澤ふよう、The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition、
Nominal Determination Typology, Context Constraints, and Historical Emergence、John Benjamins 社、査読有、２００７年、３１１－３３７

③ 大澤ふよう、文法化への一視点、津田塾大学言語文化研究所報、査読有、２１号、２００６年、５７－６８

④ 大澤ふよう、From Parataxis to Hypotaxis、LEXICON、査読有、３６号、２００６年、４１-５４

〔学会発表〕（計６　件）

① 大澤ふよう、英語史における機能範疇の創発―言語における個体発生と系統発生、第２６回日本英語学会　シンポジウム「機能範疇の創発―通言語的視点から」、２００８年１１月１６日、筑波大学

② 大澤ふよう、Impersonal and passive constructions from a viewpoint of functional category emergence: What happened to them in the History of English?、
15th International Conference on English Historical Linguistics、２００８年８月２５日、Germany, University of Munich

③ 大澤ふよう、The Development of Gerund Constructions in the History of English: from Morphology to Syntax、Studies in the History of the English Language 5、２００７年１０月５日、USA, University of Georgia

④ 大澤ふよう、Recursion in Language change、The Society of Historical English Language and Linguistics International Conference 2007、
２００７年９月７日、名古屋大学

⑤ 大澤ふよう、The Emergence of DP in the History of English: the Role of Mysterious Genitive、
18th International Conference on Historical Conference、２００７年８月７日、Canada, Université du Québec à Montréal

⑥ 大澤ふよう、The Evolution of Syntactic Structure in the History of English: the Meaning of Recursion、
18th International Symposium on Theoretical and Applied Linguistics、
２００７年５月５日、
Greece, University of Thessaloniki

６．研究組織

(1)研究代表者

大澤　ふよう (OSAWA　FUYO)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：１０１９４１２７

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし